

アメリカ地球物理学連合2006年秋季大会

東京学芸大学教育学部物理学科 助手
鴨川仁

貴財団からご援助を頂きまして、2006年12月11日から15日にアメリカ・サンフランシスコで行われましたアメリカ地球物理学連合2006年秋季大会に出席させて頂きました。この秋季大会は毎年12月サンフランシスコで行われるものでアメリカ地球物理学連合の会員が集まり発表するものです。内容は固体地球物理から宇宙惑星科学まで多岐にわたります。参加者の数も膨大で1万人を越えていると聞きました。また、アメリカの学会ですが、会員は全世界に及ぶため日本人の参加者も多く、国際会議的な役割もある大会だと思われています。会議は5日間早朝から夜までいくつものセッションが同時平行で行われ、まさに巨大会と呼ぶにふさわしい学会です。そして、私は地震の前駆的な電磁気現象のセッションにおいて口頭発表をさせて頂きました。



地震の前駆的な現象として観測される電磁気現象や大気圏・電離圏擾乱は数十年にわたり報告されていますがまだ存在を示す確固たる証拠はありません。大地震は同一箇所で頻繁に発生しないため地上観測では統計的な結果が得にくいからです。しかし、全世界を見渡すと大地震はたくさん発生しているため、衛星観測は世界中で提案されています。特にフランス国立宇宙研究センター(CNES)は、2004年に地震関連現象の検知をめざしたDEMETERという衛星を打ち上げ、本セッションにおいてもDEMETERの観測結果について3件の口頭発表がありました。もちろん既存の他の衛星などのデータも活用できるためそれに関連する発表も2件ありました。本大会の2ヶ月前になりますが、私は地震の前駆的な大気圏・電離圏擾乱現象についてアメリカ地球物理学連合のニュースレターEOS誌にレビュー論文を発表し、この現象の存在そのものの存否、考えられるメカニズムなどを議論し多くの反響を頂きました。特に紙上における反論コメントについては、今後この分野の科学的議論を活発にさせるのではないかと期待させるものです。今回の発表もこの内容を中心に行い、多くの研究者と議論を交わしました。この分野の学問的背景は地震学に始まり大気・電離圏物理まで含めた多岐にわたるものであるため、このような様々な専門家が一同に集まる本大会は議論やコメントをもらうに際して極めて有益です。今回の参加でも多くの議論・コメントを頂いたのは貴重な財産となりました。

渡航の様子 最後になりましたが、このチャレンジングな分野にご理解を頂き、本大会への参加に対して助成をしてくださった 財団法人宇宙科学振興会に対して、厚く御礼を申し上げます。